

令和5年 4月10日

釜石市議会議長 様

公明党

細田孝子



会派視察調査報告書

当会派所属議員による視察調査を下記の通り実施しましたので、報告致します

1. 視察項目：みやぎ東日本大震災津波伝承館の見学について

日時：令和5年3月29日(火) 13:30~15:00

参加者：山崎長栄、細田孝子

相手方：宮城県東部地方振興事務所 地方振興部部长 田畑幸浩 様
// 地方振興部企画員 五十嵐 綾 様
(伝承館館長)

場所：みやぎ東日本大震災津波伝承館(宮城県石巻市)

研修内容：

石巻市では約4千人が亡くなられた国内最大の被災地で在り、特に南浜地区は、津波と火災により約500人の方が犠牲となっている。伝承施設のある石巻南浜津波復興公園は、土地の履歴、街の記憶、追悼と被災の記録を次世代へ伝え続けることをコンセプトに追悼の広場や祈りの場など多様な場を整備しており、みやぎ東日本大震災津波伝承館もその一つである。建設費には総額76億円を要し、国・県・市で負担。管理運営は宮城県が行っている。

施設内を見学する前に田畑部長より、施設が整備されている公園内の紹介と震災当時の南浜地区の状況から現在までの復興状況についての説明を受け、その後、施設見学を行う。施設内では、解説員の説明を受けながら、震災前の街の情景や震災当日の映像、パネルや写真による地震・津波・火災の被害等、過去のデータも含めた展示、被災者の被災当時から現在までの証言映像など、様々な角度からの大震災の教訓と伝承を学ぶことが出来た。また、解説員の説明の中で、過去の津波の認識や教訓等、意識が高いのは被災3県の中で岩手県がダントツに高いとの説明があった。

尚、伝承館は令和5年6月の開館から現在まで9万4000人の方が来館しているとのことである。

所感・課題：

此れまで、みやぎ東日本大震災津波伝承館に限らず、何ヶ所か東日本大震災による伝承施設を見学しているが、どの施設に於いても、震災前後のまちの変化や震災当時の状況や被災者の証言、発災から復興の流れを紹介している。共通していることは、津波からの最大の教訓は「逃げること！先ず逃げて命を守ること」と言う点であるが、みやぎ東日本大震災津波伝承館では、その伝承の在り方に工夫がされている。生死を分けた被災者の体験や後悔の思いを証言する“逃げる”ことを強く訴えるシアターや、被災された方々が震災当初から現在に至るまでの証言を映像で紹介し震災を考えるきっかけにするなど、映像を活用した伝え方は年齢を問わず、多くの方の記憶に残るのでは無いかと感じた。当市に於いても映像での紹介をしているが、その内容や在り方について改善が必要では無いかと思う。

また、みやぎ東日本大震災津波伝承館の周辺には、石巻市が震災遺構とした市立門脇小学校や伝承交流施設MEET門脇が在り、それぞれの施設が違ったコンセプトで整備されていると伺い改めて見学したいと思った。今後は、一度だけでは無く何度も足を運びたくなるようなリピーターを増やす取り組みも必要では無いか。

2. 視察項目：東日本大震災 原子力災害伝承館の見学について

日時：令和5年3月30日（水）12：45～15：30

参加者：山崎長栄、細田孝子

相手方：東日本大震災原子力災害伝承館 副館長 後藤雅文 様

場所：東日本大震災 原子力災害伝承館（福島県双葉町）

研修内容：

東日本大震災 原子力災害伝承館は、東京電力福島第一原子力発電所から直線で約4キロメートルの位置に整備された施設である。建設費は約53億円、3分の2の国庫補助を受け整備され、福島県立の拠点施設として、約27万点の収集資料を活用した展示や、関連調査・研究・研修の実施等を通じ、原子力災害等に係る福島を経験を国内外に発信している。

館内を副館長の説明を受けながら見学。始めに地震・津波・原子力事故発生当時の映像とアニメーションを組み合わせた大型スクリーンでの視聴から始まり、その後は展示されているパネル等の解説と併せて、発災当時の状況について説明頂いた。福島県は、津波等の死亡者よりも関連死の方が多いとの説明があった。一例として双葉市立病院の避難の様子が紹介され、11時間もの間、入院患者を大型バスに乗せたまま受け入れ先を探したが見つ

からず、結果、4～5人の患者が亡くなったと。原子力発電所の爆発が続き、住民が追い出されるようにまちから避難した状況や混乱した様子が強烈に伝わった。また、原子力災害の影響による放射性物質の除去や風評被害の払拭、長期避難者への対応などを模型やタッチパネル等を用いて解説している。加えて1日4回開催される語り部講座では、震災を経験した語り部の方々の生の声を聴くことが出来、視察当日は、「東京における3.11東日本大震災と福島第一原発事故」について聴講した。

尚、令和2年9月の開館から令和5年1月末現在で約17万人の方が来館しているとのことである。

所感・課題：

原子力災害が危惧され、生まれ育った故郷も家も生業も全て捨て、避難しなければならなかった住民の想いは如何ばかりであったか。発災当初の混乱から抜け出し、やっと復興に向け生活が動き出した今に至るまで、見応えと説得力のある展示が続く。また、語り部講話の題数も多く、興味深い内容であることからリピーターが多いのではないかと感じた。当市に於いても検討してはどうかと考える。

仙台駅から常磐線で双葉駅までの移動中、町に近づくにつれて人影が少なくなり、手入れがされていないままの空き家が目立つなど、その風景に津波被害とは全く違う被災地の現状を垣間見たように思う。改めて、目に見えない原子力災害の脅威を感じた。ニュース等では得られない多くのことを学ぶことが出来た。

以 上